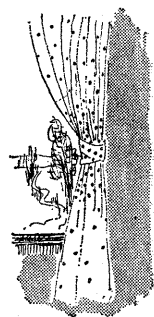


外へ、外へ

倉橋惣三選集 第二巻より

春風が誘いに来る。蝶々が迎えに来る。若草は褥しよとを敷いて、花は美しき笑みをたたえて、野も山も子供の外遊を待ち設けている。花の香草の香をとり添えた、かぐわしく新しい野の空気と、万人の浴するに任せて、与えて惜しまない豊かな日光と、皆これ子供のために備えられた、大なる自然の恩恵ではないか。何者の無情漢ぞ、この好季においてなお子供の足かせする。せめて、この好季にあたって、その狭くらしい煉瓦塀の囲いと、きゅうくつな保育室の机腰掛けから、つとめて子どもを解放せざる、何も屋根の下のみが保育の場所ではあるまい。その手を引いて丘へ上り、そのすそをかかげて小川を渡り、野を馳せめぐりて花を摘み、磯をつたうて貝を拾う間に、そこに大きな保育の場所があるのではないか。

広い自由な遊び場と、新鮮な空気と、充分な日光とを、子供の



身体の立場のみから賛美するのはまだ足りない。吾人は寧ろ子供の精神の眞の発達のために、第一欠くべからざるものとしてこの三つを要求する。わけても快活にして、清潔にして、温雅なる子供の性情の発達のために、何よりも無くてならぬものはこの三宝である。しかも都会の文明は、だんだんにこの宝を子供から奪って、都会幼児のこの点における不幸は、日一日とその度を加えてゆくのである。眞に子どもを幸福を願うものは、先ずこの不幸から、我等の小さき友を救ってやらなければならぬ。我等の幼稚園における四時不絶の急務の一つもまた、常にこの点に存する。少なくともその適切なる機会を捉うることにおいては我等は決してウツカリしてはならぬ。まして気無精、足無精であってはならぬ。

(以下略)

昭和十七年二月



倉橋先生とともに 園水幼稚園のお茶

「春ですなあ……」と少しおどけた笑顔でおっしゃりながら、お茶大附属幼稚園の庭にあるばらの家のつるばらの芽のふくらみほぐれているのに見入っておられた倉橋先生のお姿が、はっきり目に浮かぶ。あれはたしか卒園児への記念写真をとるので、教員一同がそこに集まったときであった。その写真は今も私の古いアルバムに収められているが、そのとき、先生のお心の中にはさまざまなものが湧くようにみちあふれておられたのではなかっただろうか。「春が来る、子供らのために春が来る、幼稚園のために春がくる」と、熱っぽく、とさえ思われる文章につづいて「外へ外へ」が書かれている。

原っぱを走り、汗ばんだ顔の輝く目、庭のすみにみつけた小さな白い花をそっと渡してくれる掌てのひらのぬくもり、そのような胸を熱くしている私ではあるが、感じ方の何と浅はかで厚みのないことだろうとわれながら悲しくなってしまう。「外へ、外へ」にはもっとももっと深く行き届いた子どもへの愛情といおうか祈りといおうか、思いがこめられているように思う。この文章が書かれた数十年前、すでに都会の文明が「広い自由な遊び場と、新鮮な空気と、充分な日光という三つの宝」を子どもたちから奪って

清水 光子

ることをなげいておられる。「何も屋根の下のみが保育の場所ではあるまいに、この三つの宝を子どもに回復することが「幼稚園の四時不絶の急務の一つ」であるし、そうすることが私たち今の大人が子どもたちへせめてものおわびのしるしではないかと思う。かけがえのない私たちの子どもたちへの、かけがえのない三つの宝を何としても取戻すために、「氣不精足不精であってはならない」のだ。

幼稚園教育要領の自然領域のねらい云々など堅苦しいことはいうまい。「子どもに充分に四季を知らめしよ、四季を楽しませよ」との警告をしつかり胸にきざんで「愛する子どもを真に心配なく外へ連れ出す機」をのがさないようにしよう。「保育予定案の如き、少しくらいいいかにしてもよい」という言葉に甘えておろかな保育をしたい。「子どもの自己活動のもっとも正当な資料として自然は一番」であり「理屈もなく自然は教え、教えずして活動せしむる自然」である。しかも自然はいつも和やかに暖かいばかりでなく厳しく冷たい時もある。子どもにもそれを感じとらせることが大切ではないだろうか。

私たち自身「もっとまじめに、もっと謙遜に、自然の表面の美を享受するばかりでなく」まず自然と一致することではないだろうか。そして衿を正して、自然の恵みを、三つの宝を子どもたちに

一杯にうけさせるように努力したいものである。

「シート。だまって！ 何かないてるよ！」

田んぼの、まだれんげ草がそこに咲いているかわいた所におべしとうを広げているとき、かえるの声をききつけたAちゃん。

「ねえ、聞こえるでしょう？」

砂浜でみつけた巻貝の殻を私の耳にあてるBくん。

斜面の草原、茶色っぽく枯れかけている草原を歓声をあげてころげ降り、顔をうつむけたまま「ああ、いいにおい！」というC子。

葉をすっかりおとしたいちちょうの木の、更に上を見上げて何も言わずにいる子どもたち三人。

倉橋先生がよくおひきになる「自然と一つになるは児童の榮譽なり。児童と一つになるは教師の榮譽なり」とのスタンレー・ホルの言葉を繰返し心に銘じよう。

それにしても、倉橋先生が言われていることを、私は少しでもわかっているのだろうか、先生はもっともっと深いお考えであつたのだろうか、ああ……。

(音羽幼稚園)

榎田 正子

「ママ、春にならないと桃の花咲かないんでしょ？」

「そうねえ」

少し早いかなと思いつつ出したおひな様に目を輝やかせて見入っていた息子が、突然口を開いてこう言った。おひな様に無くてはならない桃の花がまだいけてないそのさみしさを、敏感な子どもの心が一瞬に感じとったのかもしれない。ここにも春を待つものがあつた。われわれ大人はその幾年もの経験から、ありとあらゆるものが息ぶぎを始めるわくわくするような生命力や、れんげの花のピンク色にトッブリとつかってしまいたいようなあのかぐわしいあたたかさを頭に描いて春を待つが、三歳や五歳の子どもやはりそれなりに一日も早い春の訪れを待っているのだ。

春になったら——倉橋先生も書いておられるように、つとめて子どもたちを戸外に連れ出そう。自然の中で遊ばせよう。子どもたちはきつと私の手をふりほどいてかけ出して行くにちがいない。そして五歳の息子は彼なりに、三歳の娘は彼女なりに、それぞれを持つたくましいそれでいてこまやかな心で、自然とまじわり、発見し、春を感じとることであろう。そんな子どもたちを見

ながら、私もまた私なりに身も心も伸ばして、胸いっぱい深呼吸し、春の新しさを満喫したいと思っている。青い空の下、緑の草の上では特に、「ほらもんしろちょうよ、見てごらん」「この花のにおいをかいでごらん、いいにおいよ」といった姿よりも、ともにも大いなる自然の腕にいだかれた仲間として、それぞれのからだ、それぞれの心で、ちょうを追ひ、花を見つめていた方がふさわしいような気がするからだ。

そしてそんな仲間同志の心がふとひとつのものに向いた時、（この瞬間に私は大いに期待をよせているのだが）そこには思いもかけない深くうれしい心のふれあい——真の共感とでもいうのだろうかが生まれるように思われるのである。（もちろんこの共感、私にだけついて言えば、家の中では母親然、主婦然とした態度がじゃまをしてしまうのであろうか、どうも戸外にいる時の方がより多く体験できるのが現実である）母と子のこんな心のふれ合いを、この冬の間にも私は幾度か体験することができた。冬枯れで心によびかけるものなど何もなかに見える寒空の下でもこうであったから、すべてのものに活気がみなぎり美しくなる来たるべき春の季節には、どんなにか豊かな母と子の心のふれあいを体験できるのでないだろうか。春を待ちこがれる私の気持ちの中には、そんな気持ちも日増しにふくらんで行くのである。